

マイネッケにおける Nation の問題 (二)

西 井 克 己

- 一、はしがき —ランケ以後—
- 二、マイネッケの Nation 理解 (以上前号掲載)
- 三、マイネッケの問題意識 (以下本号掲載)
- 四、晩年のマイネッケ
- 五、むすび —マイネッケの良心—

三、マイネッケの問題意識

「国家主義と民族理念」は、一九一四年の七月、即ち第一次世界大戦勃発の直前、コッタの月刊雑誌「Der Greif」のために書かれた。⁽¹⁾ また「世界市民主義と国民国家」は、その初版以来、私の見た第七版を累ねる一九二二年にいたるまで、マイネッケ自ら、例えば一九一八年十一月の「第五版への序 (Vorwort zur Fünften Auflage)」⁽²⁾ 即ち「ドイツがこの数週間に遭遇した衝撃的運命 (敗戦とドイツ革命—筆者) は、この本の中で扱われ来った二つの問題の根本に触れている。…私のこの本は、その成立期を通じて受けた刻印を保持すべきである。私の信ずるように、本書の最も内面的な根本思想は、新しい時代においても維持されるであろう」⁽³⁾ のように、その意義の未だ決して喪われていないことを述べているものである。従ってわれわれには、殊に問題意識の点に、両者間に極めて強く深い繋がりと

一致のあることが当然推察されるが、私には前者の方に、それが、より明瞭に窺いうるものがあるかのように思われる。冗長をいとわず、先ずその紹介から始めたい。

「十八世紀と十九世紀の転換期は、新しい言葉『国民性 (Nationalität)』をつくり、且つそれに不安な若さと神秘的な古さをもった一つの光沢を与えた。そしてその中では、最も多様なもの、即ち非常に純良さをもった、だが単なる個人的なものから、民族文化の一般的な母胎を求める個々人の文化理想、同時に新しい、より生き生きとした、且つ、より精神力豊かな国家へのあこがれ、過ぎ去ったものへのロマン主義と、民族・国民の大きな未来への希望等々が混合してきらめいている」。これに対し「十九世紀から二十世紀への転換期は、更らに新しい言葉を、国民生活の特徴づけのために弘めた。それは『国家主義 (Nationalismus)』という言葉である。この言葉は十九世紀の始めに、ドイツの理想主義者やロマン主義者たちが、かくも好んで口にした高貴で、若くて新鮮な言葉に対して、それが蔽っている内容の故に、どれだけ粗々しくわれわれの心を惹くことだろうか。勿論今日、それは優れて非難的な意味に用いられ、『国家主義』が意味するものの反対者が多くそれを口にし、且つそれを以って、健康な民族的な努力の一つの変種と過度の緊張とを特徴づける。然しこの変種と過度の緊張は非常に拡がったので、国家主義は国際的な現象となり、また殆んど、十九世紀の全般的民族運動の一つの普遍的並びに不可避的な最後の結果として現われる」。だが「国家主義は、十九世紀の民族運動の唯一の最後の結果を形成すべきではなく、またそう許されもしない。何故なら、人はそうでなければ、ただ不安の念をもってヨーロッパ文化の将来を見えたであらうから」。われわれには、「国家主義を、より高貴で豊かな民族概念を通して克服することが肝要であるが、それを行いうるためには、特に先ず国家主義に、より綿密に通暁することが必要であり、またその諸前提、現象諸形態、その弱点、然しその強大さをも理解することが必要である。―何故なら、この場合はただまさしく誤って導かれてはいるが、その中には、生き生きとした歴史的諸力も効力を発しななければならないから」⁽³⁾。

われわれには、マイネッケが何故「国家主義と民族理念」の問題を論じなければならなかったかが、既に明らかである。即ちマイネッケにとっては、「民族観念は、今日ドイツにおいては一世紀前よりも非常に多く、より広げられた層によって担われてはいるが、然しこのような拡張は、民族観念を危機にさらした。この観念の育成を先ず天職とし且つ義務づけられている教養ある諸階層は、力強くひろがったが、然しそれは、精神的內容、眞の文化、現実的教養にも相応しいものとしてではなかった」。即ち、「営利並びに経済生活の予想もしなかった急激な發展」等々の結果、中産階級は変化且つ拡大して自己の勤勉、精力、自活的幸福に誇りを感じたが、これら勇敢な人々は：「眞の教養は、謙虚と判断の抑制をもって始まること、あらゆる外国風のものに冷静な尊重と開放性をもって対すること、そして最後には探究しがたいものへの畏敬に達することを忘れた」。従つて、「正しくこれら生半可な教養をもった各層にこそ、高慢な国家主義同様、未熟な政治的見解、独断的な非政治的過激主義が巣くい」、やがて「階級的高慢と社会的な主人的自負が偏狭な愛国主義と結ぶ時、事態は全く悪化し、その偏狭でがらがら音のする非寛容性は：われわれの信用を失墜させる」と憂えられたからである。われわれにはここに、マイネッケが如何に、階級的、従つてまた民族・国民の傲慢さと結びつくショーヴィニズムを憂慮したかが知られる。

かくてマイネッケは、彼に「最も近いもの、即ちドイツについて触れ」ようとして、ここドイツでは、「十九世紀の新らしい民族運動の荷担者たちは、最初は殆んど全くドイツ的精神形成の担い手でもあった。即ち詩人、哲學者、あるいは政治家がそれであり、彼らは、多くは若い時から既にかかる精神形成の影響下になつていた。民族は、彼らにとっては人類の一つの特殊な表現であつた。即ち、その中で人類の精神が現われるような一つの特殊な美しい特徴に富んだ、そして個性的な形態であつた。人々は、自分の民族がその特異な素質をひろげ、且つ文化も国家の中で人類の大きな宝庫を豊かにした特有な価値を發展しうるために、独立で、自由で、頑健で而も有力であることを望んだ」ことが顧みられたのである。

偏狭、過激な愛國主義への危機を前にして、ドイツ民族のあるべき真に正しい姿は、民族・国民を人類の特殊な表現として把えることにある。更らに言えば、「人は正しく国家を、そしてまた一般に生命のあらゆる客観的、超個性的力と組織とを、世界を無視して世界から作るのではない。また精神的な生活内容の最大限を志す人は、世界を包括すべきである。世界を自己の中にとり入れることは、国家や力、組織に身を献げ、それらに奉仕することを意味する」と説くマイネッケの立場こそ、また「世界市民主義と国民国家」の精神でもあった。彼の本書第二版（一九一一年五月―筆者）への序（Vorwort zur Zweiten Auflage）には、「この著は…ドイツの歴史研究は、世界的であると同時に国民的であることによって、始めてその最も固有の本質を発展させることが出来るという考えに基づいて著わされた」と述べられ、また同「第三版（一九一五年三月―筆者）への序（Vorwort zur Dritten Auflage）」の中でも、「この新版の印刷は、世界戦争（第一次―筆者）が勃発した時既に始められていた。ドイツ民族の新しい歴史的生命への上昇以来、ドイツ民族にひらめいていた世界市民主義と国民国家の二重の理想は、われわれをして容易に世界国民にたかめるべき筈のこの戦争によって新しい形態をうるであらう。…かつて安らかな中で生れたこの本が、今やまたこの時代の諸要求に何物かを貢献せんことを祈る」と記されているのである。

マイネッケの右の「国家主義と民族理念」その他の論文を集めてマイネッケ全集の第二巻「政治的論文、演説集（Politische Schriften und Reden）」とした編集者コトヴスキーは、右の論文の解説のところで、「民族感情の粗雑化、無拘束な国家主義、及び人種観念の擡頭などが、既に第一次大戦前にマイネッケを不安をもつて満した」と述べているが、マイネッケにおける Nation に対する問題意識をこのように理解することは、果してただ単なる私の恣意にのみよるのであろうか。

ゲッツは、「一八六二年十月エルベ左岸のアルトマルクにある小都市ザルツヴェルデルに、プロイセンの一高級郵便官吏の子として生れた」マイネッケは、やがて父の転任とともに一八七一年ベルリンに移った。彼には「将来非の

打ちどころのないプロイセンの役人たるべきあらゆる前提が与えられていたように見えた」。然し彼には、「一九〇一年シュトラスブルクの近代史担当教授への招聘がもたらされた」。そして彼にとって「この新らしい世界への移住は、どんなに幸福だったことだろうか。…シュトラスブルク時代は、マイネッケにとっては極めて短い期間ではあったが、それは彼にとって最高の重要性をもっていた。即ち彼にとって、ドイツがプロイセンに取って代ったのである。

…一九〇六年から一四年秋までつづいたマイネッケのフライブルク時代は、この印象を深めたが、同時に不慣れな人々によって世話されたドイツの将来についての憂慮を増した」と、マイネッケの思想的遍歴を語る。この間の消息

は、彼マイネッケの回想録「シュトラスブルク、フライブルク、ベルリン—一九〇一—一九一一年—」(Strasburg, Freiburg, Berlin, 1901-1919)⁽¹¹⁾にも詳しいが、かくマイネッケにとつて極めて重要性をもったシュトラスブルク

は、彼の言葉をかりれば、「ドイツ文化とフランス文化との斗争の場」⁽¹²⁾であり、また、「いわばフランスとイタリアへ

の大きな岐れ道」であつて、彼の「広い視野を開」いたところであり、やがて彼は一九〇五年イタリアへの旅にのぼる⁽¹³⁾。若しわれわれにして、シュトラスブルクへ来て「プロイセンが、ドイツにとつて国家的且つ文化的に意味するも

のを見逃しはしなかったが、然し…今やこれらの諸特徴と弱点を認識して、南ドイツの生活の特色と正しい和解の必要を認め…ドイツ的愛国心が生ずる」⁽¹⁴⁾にいたったマイネッケの視野が、もとよりランケ、ブルクハルト、ディルタイ

などの強い影響にもよることながら、⁽¹⁵⁾更に深く且つ拡げられ、国家的なものと世界的なもの、民族ないし国民的なものと人類的なものとの何らかの綜合に向けられるにいたつたと考えうるならば、以上述べたようなマイネッケの民

族・国民観にも、あるいは若干の関連性が認められるかも知れない。

然しマイネッケが Nation の問題を論ずるのは、ただ右にのみ尽きるのではない。「近代の耽美主義者は、主観的権力の権利に度を過ぐす。そのように、近代の国家主義者は客観的権力の権利を越して主張する。国家主義者は、各個人から国家及び国民性の要求への一つの頑固で一様の隷属を求める。その際われわれが述べたように、いとも容

易に支配階級の特種な諸要求もまた秘かに忍びこむことが出来る。かくて民族・国民の生き生きした自由な理想はおきまりのドグマに、即ち若し不決断や怠惰をせまられまいとすれば、頭をさげねばならないゲスラー（Gessler）の帽子となる。国家主義は、自由で多様で区別された民族文化ではなく、ただ図式的且つおきまりの民族文化のみを必要とすることが出来る。国家主義は、われわれの歴史の偉大な人物、即ちルター、フィヒテ、シュタインやビスマルクにも、問題となるもの、及び革命的なものを非常に平面的に充分アイロンをかけるから、いわゆる『純粹ドイツ人』の幻像だけが残る。民族文化の最も個性的で且つ興味深い諸現象は、正しくここでは危険であり、誤認されるか忘れられる。何故なら、今日の国家政治的な課題に対して直接的關係や實際的有用性をもっている要素の現象のみが、なお価値に富み、真の意味の『国家的な』ものとして妥当するからである。：国家主義の一方的に全く一神教的な傾向は、民族的素質と価値の宝物を減じ且つ狭ばめる。このことは、他の諸国民の国家主義と全く同じように、全ドイツ人の国家主義にも妥当する。だがこのことによって、諸国民の境界線を、より尖鋭にひき、且つ自分の国民を、より排他的につくりあげることをもって始まった国家主義は、あるいは最後には、寧ろ諸国民の内面的差異を平均化するのではないかとの疑問が更らに起る。このように、實際、人がかかる視点の下で従来殆んど注意することがなかった民族運動の注目すべきものゝ随伴現象があるのである⁽¹⁶⁾。

われわれはここに、「光、高さ、人格へと押しあげるような」民族を願ってやまなかったマイネッケの Nation に対する別の問題意識、即ち、既に、個性否定の劃一主義と排外主義、殊に権力主義などを特徴とする国家主義へと転じ去ったナシヨナリズムに対する彼の深い憂慮の念をしみじみと感ぜずにはおられない。マイネッケが「国家主義と民族理念」の中で述べたかかる国家主義への批判的見解は、私が既に以上述べ來った彼の Nation に対する問題意識と決して別個のものではなく、互いに緊密な関連のあるこというまでもないが、ここでは殊に、「国家主義者は、国民と国家が非常に熱心に切望した権力は、権力への支配的且つ高慢な意志によってのみ獲得されるのではない。即

ち、なお深い源から由来することを忘れて⁽¹⁸⁾いる」とも説く彼の権力主義、強権主義に対する抗議と、個性否定の劃一主義への批判が注目された。マイネッケが、第一次世界大戦に何よりも期待したものは、それが「ドイツ民族の中で盛んとなった有害な国家主義のすべての附加物に対する浄化の火ともなろう⁽¹⁹⁾」ことであつた。

その際マイネッケが同じ論文の中で、「諸国家と諸国民の生命は、国家と文化の間のそれぞれの、より深い亀裂に直ちに橋渡しすることを、既に国家の最も固有な権力関係の中で強制的に大きく必要とする。啓蒙された政治家こそ、正しく国家理性(Staatsräson)から、民族の文化を狭め且つ貧弱にしている国家主義への反対者でなければならぬ」とも、また、「われわれの問題にとってわれわれは、われわれが丁度体験したことから、国家主義はここでは古い、歴史的に深く根ざした、また大きな共通の文化財を含んだ国家制度がもつ国家観念の精神的力の中でその限界と懲治方法を見出したという一つの大きな教訓を、既に引き出すことが出来る。最高の意味における国家理性は――恐らく人はこういつてもいいかも知れないが――有益な水のように、国家主義の急速な熱に影響を及ぼした。また同時に文化の真の利益も、国家理性の側でよく保護されて来た⁽²⁰⁾」と述べる時、われわれには彼の、差当つては同じ三部作の一つである「近代史における国家理性の理念(Die Idee der Staatsräson in der Neuren Geschichte)」への、そしてやがては「歴史主義の成立」への道が、更らにいよいよ大きく拓かれつつあることが感ぜられるのである⁽²¹⁾。

- ① Meinecke, "Nationalismus und Nationale Idee" in Politische Schriften und Reden. M. W. II. Darmstadt, 1958. S. 88.
- ② Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat, 7te Aufl. München, 1922. S. VII.
- ③ Meinecke, Nationalismus und Nationale Idee. M. W. II. SS. 83-84.
- ④ Meinecke, op. cit. M. W. II. SS. 85-87.
- ⑤ Meinecke, op. cit. M. W. II. S. 84.
- ⑥ Meinecke, op. cit. M. W. II. S. 88.

- ⑦ Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*. S. VI.
- ⑧ Meinecke, op. cit. SS. VI-VII.
- ⑨ Kotowski, *Einführung des Herausgebers zu "Meinecke, Politische Schriften und Reden. M. W. I. Darmstadt, 1958."* S. 35.
- ⑩ Goetz, Friedrich Meinecke. *Leben und Persönlichkeit*. H. Z. Bd. 174. Heft 2. S. 231. SS. 234-37.
- ⑪ Meinecke, Strassburg, Freiburg, Berlin, 1901-1911. Stuttgart, 1949. S. 42.
- ⑫ Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*. M. W. III. München, 1959. S. 455.
- ⑬ Meinecke, Strassburg, Freiburg, Berlin, 1901-1919. SS. 42-43.
- ⑭ Goetz, op. cit. SS. 236-37.
- ⑮ Goetz, op. cit. SS. 247-48.
- ⑯ Meinecke, *Nationalismus und Nationale Idee*. M. W. II. SS. 88-89.
- ⑰ Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*. S. 24.
- ⑱ Meinecke, *Nationalismus und Nationale Idee*. M. W. II. S. 91. マイネッケは、「トライチュケの権力思想についても、彼は「国家の本質はただ権力であると繰り返し告げ、それによって国家の本質を狭隘化、且つ生の中において単純、簡潔な主張を求める無数の人を、単なる権力の過大評価と誤った尊敬へと、またかくて国家的根本問題への粗雑化へと誤って導いた」と批判的に述べている。(Meinecke, *Die Idee der Staatsräson in der Neueren Geschichte*. M. W. I. München, 1957. S. 468.)
- ⑲ Meinecke, *Nationalismus und Nationale Idee*. M. W. II. S. 95.
- ⑳ Meinecke, op. cit. S. 91. S. 94.
- ㉑ ゲッツは、「マイネッケの『国家理性の理念』について、この著書はやはり政治的な点から出発したが、然し精神的な問題が確実にその見解に、より強く役立っていた。マイネッケは、一九〇六年『世界市民主義と国民国家』において始めたものをつづけていた」と述べている (Goetz, op. cit. S. 244.) が、マイネッケの回想録はこのことを裏づけている。即ち彼は、「シユトラスブルク時代イタリアの旅にのぼったが、フィレンツェのサンタ・クロッチェの中でマキアヴェルリの像を見、「私のマキアヴェルリに対する関心は、ここで始めて生き生きしたものになった。美に満ちた世界の中で、権力政治の困難な問題が私をとらえた。私のものの『国家理性の理念』への最初の出発点は形づくられた」と述懐しているのである (Mei-

necke, Strassburg, Freiburg, Berlin. 1901-1919. S. 43.)。なおマイネッケ自ら、その回想録の中で「シュトラスブルク時代、夙に『歴史主義の成立』の構想ももっていたと述べていることは、既に見た。第二節註の参照。因みに『歴史主義の成立』は、シュトラスブルク大学時代の想出に献げられている (Meinecke, Die Entstehung des Historismus. M. W. III)。

四、晩年のマイネッケ

「その最高の形態をとった民族理念が、素朴な国家主義に打勝つ。それがわれわれの戦争の世界的意義となる⁽¹⁾」と、「非常に深刻で、また大変興奮してはいたが、然しそれでもなお希望に満ちた気分であった大戦 (第一次筆者) の最初の数年間を過した」マイネッケにも、大戦の敗北とそれに伴う「ドイツ崩壊のおびただしい動揺」が襲った。かくて既に「『世界市民主義と国民国家』の中で論ぜられたものから生じた『国家理性の固有の中心問題が、いよいよますますその恐るべき姿を現わし来った』⁽²⁾」。一九二四年、遂に「国家理性の理念」創刊の運びとなるが、その中で彼は特に何を強く訴えているのであろうか。

「国家理性とは、国家的行動に際して原則となるもの、即ち国家の運動法則をいう。それは、国家を健全且つ強力に保持して行くためには、何をなさねばならないかを政治家に教えるものである。ところで国家は、その充分な力は、ただそれが何らかの意味でなお増長しうる場合においてだけ維持されうるような有機的形成体であるのだから、国家理性はかかる成長の方向と目標をも指示す。だが国家理性は、それらを恣意的に選択することは出来ないし、またあらゆる国家に対して、普遍妥当的且つ一様に挙示することも出来ない。何故なら、国家はまた固有の生活理念をもった一つの個体的形成体であるからであり、而もかかる個体的形成体の中では、かような普遍的な法則は一つの独特な構造と環境とによって修正されるからである。かくて国家の『理性 (Vernunft)』というものは、自己自身及びその環境を認識し、且つかかる認識によって行動の原則をつくりあげようとするこの中にあるのである」。従

つて、「国家的行動に対する歴史的判断のすべては、当該国家の眞の国家理性の秘密を発見しようとする試み以外の何物でもない」が、マイネッケによれば、「クラトス (Kratos) とエトス (Ethos)、即ち権力衝動による行動と道徳的責任に基づいた行動の間には、国家的生活の高いところにおいて一つの橋」、即ち「何が合目的、有用且つ幸福であるか、また自己の生存の幸福をしばしば獲得せんがために、何を国家がしなければならないかの考慮」こそ、「ほかならぬ国家理性」そのものであつた。かく「国家理性は先ず、而して何をおいても、政治的行動における高い合理性と合目的性とを求める」。そのため、「道徳と法則に対する意識せられた蹂躪は、たとい如何なる状態から、また如何なる動機からそれが導かれようと、一つの道徳上の汚れであり、クラトスとの共存におけるエトスの敗北なのである」⁽³⁾。

ここにもわれわれはマイネッケの、個人、国民国家の個性を無視した劃一主義、殊に倫理性を踏みにじった権力主義への深い反省と戒しめを見出しえないであらうか。而もこの両者は決して不可分離なものではない。蓋しマイネッケにとつて現実の「国家理性は、最早やゝ形成的原理では」なくなり、「破壊的作用」を行うものと化しつつある。従つて、「近代ヨーロッパの国家生活の本質、即ち自由で独立で、大きな家族だと同時に思っている諸国家の均衡が破滅に類する。かくて古いヨーロッパの歴史的役割も終りを告げ、ヨーロッパ文化は實際没落に帰しよう」と心痛され、「その肥大が惹起した可能性中最悪のもの」として、「非常に困難な危機にたつている」ことが痛感された近代の国家理性に対し、「なおなすべき最後のことは、国家理性の限界如何の古い問題を再び取りあげ、且つ政治と道徳との望ましい関係を、歴史的考察と時代の体験が明らかにしたように叙述すること」にあると考えられたからであらう。⁽⁴⁾

マイネッケはまた、国家理性の理念の特に「ドイツ的思惟の深い欠陥」について、それは、「権力政策は、より高い倫理性に相応しいものであるとの説によって権力政策の弁解的理想化を來した。そのことによつて、人が行つたあら

ゆる倫理的並びに理想主義的留保にも拘らず、粗雑な自然主義的及び生物学的な権力倫理成立のための余地が与えられた⁽⁵⁾」とも断じているが、「権力政策の誤った理想化とともに：国家の誤った崇拜もやめられねばならない。このことは、国家が当然要求すべきで」あり、「ドイツの興隆以来ドイツ精神を導き来ったこれらの高い要求は、ドイツ国家が外国及び自分の手によって辱かしめられ、地に伏している今日始めて妥当する。国家は倫理的たるべきであり：普遍的な倫理法則との調和に努めるべきである⁽⁶⁾」と強く訴えて、その浩瀚な著書の最後を、「国家理性は、行動的政治家に対して、ただ彼がどうしても振いおとすことの出来ない悪魔に圧倒されないために、国家と神とを同時に心の中に抱くべきであると呼びかけることだけが許されるのであるまいか⁽⁷⁾」と結んでいる。

「国家理性の理念」の編集者ホーフアーも、「第一次大戦後の数年間にはつきりした形をとるにいたったこの本の、歴史的並びに哲学的出発点は：マキアヴェルリの個性とその思想世界にあった⁽⁸⁾」が、「やがて倫理と政治の関係が彼の前面に現われた。だが『権力の悪魔』は、マイネッケには第一次大戦の過程において始めて意識された。『国家理性の理念』は、この戦争の彼の体験なしには考えられない」と述べているが、ホーフアーは更らにつづけて、「だがこの著書の発展的な中心思想は、この大戦の前の時代から起っている。即ちそれは個体 (Individualität) の理念であるが、マイネッケは既に彼の『世界市民主義と国民国家』についての最初の理念的業績の中で、個体の理念を近代の歴史的自覚の核心として認識していた⁽⁹⁾」ことを注意している。この点私もまた既に若干留意を促したところであるが、「国家理性の理念」の中にもそれが行間に窺われうることというまでもない。マイネッケはまた別の個所で、「国家の自己維持及び成長の不可抗力的動機は、政治家をして個体的性格と一般的性格を同時に担っている行為にいやる」。だが「国家理性に従った行為の中における個体的なもの、並びに一般的なものは、先ず少くとも現象の普遍的な因果関連に摩擦なく適用する⁽¹⁰⁾」とも述べているのであるが、かかる世界における国民国家の、国家の中における個人の個体尊重の思想は、既に一九一八年それを理論的にとりあげた「個性と歴史的世界 (Persönlichkeit und

「Geschichtliche Welt」⁽¹¹⁾以来、幾多の注目すべき小篇をも前提として、一九三六年「歴史主義の成立」となって結晶した。

「歴史主義は克服されなければならないとの叫び声が、既に数年前からひろまっている」。「歴史主義が、結局掘りどころのない相対主義に陥り、また人間の創造力を麻痺せしめているのだとの考えにいたらしめた」からであるが、然しそれは、歴史主義に対する「浅薄化」によるものである。「われわれは歴史主義の中に、人間の事物の理解において従来到達した最高の段階を見るし、また歴史主義に対して、われわれの周囲及びわれわれの前に横臥している人間の歴史の諸問題に対してもまた、真の発展のあることを信じて疑わない。われわれは、歴史主義が、その価値の相対化によって受けた傷の数々を医す充分な力のあることを信じてやまない」⁽¹²⁾と、マイネッケがその確信と信頼を披瀝する歴史主義の最も核心をなすものは、一体何なのであろうか。

マイネッケ自らをして語らしめるならば、「歴史主義の核心をなすものは、歴史的・人間的諸力に対する一般的考察を、個体化的考察によっておきかえることの中にある。然しそのことは、いわば、歴史主義が今後、普遍的な合法性及び人間的生命の諸類型への考察を一般に排除するという意味ではない。歴史主義は、自らそれを行わねばならないし、またそれを個体的なものに対する感覚をもって融合せしめなければならない」が、かくマイネッケをして歴史主義を強く擁護せしめた所以は、「歴史を最も奥深く動かししている諸力、即ち人間の魂の精神こそ、一般化しようとする判断に束縛され来った」からでもある。而してマイネッケによれば、かかる「歴史主義の擡頭は、西ヨーロッパの思维が体験し来った偉大な精神的革命の一つなのであり」、特に「その栄冠は、ドイツ精神に帰した。ドイツ精神は、ここにおいて、宗教改革について第二の偉大な事業を成就したので」⁽¹³⁾あった。

一九三六年といえ、ヒトラーが首相に指名されて既に三年を経ている。いうまでもなく、ナチズムは国家社会主義(Nationalsozialismus)を標榜するものであるが、然し、ホーファーによれば、「国家社会主義や全体主義国家

の『獸的現実』」、更らにはその「權力国家思想の極度の昂まり」⁽¹⁴⁾は、右に見來つたようなマイネッケの民族・國民觀や国家權力への把握の仕方、はたまた個性尊重などと到底相容れるものではなかった。既に前年の一九三五年四月、彼が同二八年以來委員長であつた中央史學委員會 (Historische Reichskommission) は、國家の勸告を受けて解散したが、同じ年マイネッケは、四十年の永きに亘つて掌つた「史學雜誌 (Historische Zeitschrift)」の編集をも取りあげられてしまつたのである。⁽¹⁵⁾そしてやがて一九四五年のドイツ敗戦とナチス・ドイツの崩壊。その時既にマイネッケは齡八十を越えていた。ナチス政權下、その聲が一九三〇年代の「自己を顛倒するような國家主義の大衆的興奮の中で：消されてしまつた」⁽¹⁶⁾ような不遇なマイネッケ、そして今やその瓦解を眼前にしたマイネッケは、以上私が見たような Nation を中心とした諸問題を、果してどう考えていたのであろうか。われわれは、幸いにしてこれを、その翌四六年老軀而も「眼病にもしばしば妨げられつ」⁽¹⁷⁾著わされた「ドイツの悲劇 (Deutsche Katastrophe) に窺うことが出来る。

「その価値は、今日非常に限定されたものとしてののみありうるとしても、私のこの記録 (『ドイツの悲劇』筆者) が、實際意氣消沈してはいるが、然し精神的には更らに純粹な新らしい生活を始めるために、且つはまた、ドイツの民族並びに文化の實質で今なおわれわれに残されているものの救済に、われわれに残っている固有の力を尽そうとする決意を強めんがため役立たんことを願わずにはおられない」⁽¹⁸⁾。祖國の敗北に直面したマイネッケの表情は、このように意外に明るかつた。蓋し、彼の言葉を藉けるならば、彼は「最初から、ヒトラーの權力掌握をドイツにとって最大の不幸の始まりと考え、また自分の考えを批判力ある同時代人との無數の会話の中でくり返し吟味し、且つ補充して來た」⁽¹⁹⁾からでもあるが、この際、「ドイツの悲劇」が特に私の注目をひくのは、次のような諸点である。

即ち、「四十年前私は、政治史の領域において、世界市民主義と近代的國民國家理念とは、もともと動きのとれぬ對立物では決してなく、相互にからみ合う關係に、あるいは、ゲートやヘーゲルに倣つてこういつてもよからう、兩

極的にして弁証法的な緊張と共属の關係に互いにたっていることを示そうと試みた。今日その恐るべき変革の一世代ののち、われわれは今や、ヨーロッパの文化生活にもまた、同様な弁証法が妥当するという認識に達した。世界市民主義と民族的諸精神とは、ここでもまた何ら頑固な対立物ではなく、互いに組み合わされている。實際に存在したし、且つわれわれの切なる望みによって再び盛んなるべき筈の、クリスト教的西欧の世界市民的文化共同体は、上位におかれた、そして内容的に普遍的な理念と理想によってのみ作られたのではなく、個々の民族精神の全く個性的で、而も模倣出来ない貢獻によつても作られたのである。普遍的なものと個性的なものは、ここでは互いに結合することが出来る。このことはわれわれにとって、われわれの今日の悲劇的な状況においては、高い慰めではあるまいか。再びヨーロッパの文化共同体の一員として活動的になるためには、われわれは何ら過激な再教育を必要とはしない。徹底的に消滅すべきは、非文化、似而非文化をもつたナチスの妄想だけである。然し青ざめた、内容の貧弱な、抽象化された世界市民主義がそれにとつて代わるべきではなく、最も個性的なドイツの精神的業績によつて、曾て共に形づくられ、且つ将来も更らにつくらるべき世界市民主義がとつて代わるべきである。ドイツ精神は、自己へかえる道を見出したのち、なお自己の特殊で、代えがたい使命を、西欧の共同体の中で果すべきであるとわれわれは望み、且つそう信じている」²⁰とのマイネッケの、祖国「再建への道」²¹への力強い信念の吐露に、先ず注意を惹かれた私は、それと関連して、「ヒトラーの国家社会主義的実験は、それが民族的要素を、ただ退化した奔放な国家主義及び人種の妄想という恐るべき形態においてだけ混合鍋にもち込んだため、非常に不健全であつた。その結果、他の側から混合鍋へ混ぜた社会主義的要素も食用不適とされ、且つその内容も奪われた」。従つて、「世界における民族的並びに社会主義的運動の真に有益な融合に導かるべきであるとするならば、その際は、だが前者の民族運動はいたるところ民族的な肥大から再び解放され、人間化されねばならない。民族運動にとつて、また西ヨーロッパのすべての国民にとつて、振り出しへ戻ることが肝要である。民族としてのわれわれの課題は：人間性の目標をにかけて、われ

われの心的存在の純化と深化にたづさわることでしかありえない」との強調にも注目された。⁽²²⁾

更らにまた私は、「近代的な技術的、功利的な精神と、ヒトラー的人間との関連について、われわれは正に心配したところであるが」、かかる精神は、「約一世紀半から二世紀の、より古い前行形式を既にプロイセン軍国主義の中にもつていた」。「かくてわれわれは、かかるものを、第三帝国の建設を最も力強く促進した歴史的な力そのものとして言い現わしてよからう」。だがビスマルク帝国時代には、「精神と権力とを互いに一致させようと試みた古典的自由主義の綜合は、未だ死滅しなかった」。然るに「第一次大戦は、やがてそれを破壊したかにみえる」。蓋し、本来「自由主義的で、個人の自由権利を目指した運動であつた民族運動」は、その後「国家主義へ、また列強にあつては帝国主義へと昂」まり、「十九世紀の終り頃には、それとともに急傾斜に上昇した」からであるが、然し、「良心を沈黙させようとする新しいドイツの生活様式は」、爾来いよいよ「極度に昂まって、今やヒトラー運動となり、権力のための斗争において、あらゆる倫理的抑制を激しく破壊し、良心喪失の生活様式となつた」。即ち、「ヒトラー的人間にとっては、『如何なる代償を払つても権力を獲得せよ』という命令だけがなお存在するのみであつた」。かくて、「第三帝国の中で、われわれに不当に要求せられた魂の自由の強奪が、ヒトラー的ドイツに対する西方諸国民の深い嫌惡のための：最も内面的な理由をなすものであらう」とも、また、「世界的強国になることは、われわれドイツ人にとっては一つの冒険であつた」とも説くマイネッケの、厳しい批判ないし反省の態度にも、深い關心をそそれれずにはおられなかつた。

われわれはここに、「ドイツの悲劇」の頃の彼においても、私が既に右に見來つたような Nation を中心としたマイネッケの基本的精神、即ち、常に個体を尊重しつつ、個人と国家、民族・国民と人類、はたまた国家と世界とを絶對的対立物としてではなく、弁証法的相互関連において把えるところに、その際飽くまでも強權主義を排撃しようとした彼の歴史家としての学問的信念が、なお脈々として生きつづけ、終始力強く貫かれている姿を、余りにも明瞭に

認めえないであらうか。

- ① Meinecke, "Nationalismus und Nationale Idee" in Politische Schriften und Reden. M. W. II. Darmstadt, 1958. S. 95.
- ② Meinecke, Die Idee der Staatsräson in der Neueren Geschichte. M. W. I. München, 1957. SS. 25-26.
- ③ Meinecke, op. cit. SS. 1-2. S. 5. S. 7.
- ④ Meinecke, op. cit. SS. 498-99.
- ⑤ Meinecke, op. cit. S. 502.
- ⑥ Meinecke, op. cit. SS. 505-506.
- ⑦ Meinecke, op. cit. S. 510.
- ⑧ このことは、第三編註⑤に詳しく述べた。
- ⑨ Hofer, Einleitung des Herausgebers zu "Meinecke, Die Idee der Staatsräson. M. W. I. München, 1957. SS. VII-III.
- ⑩ Meinecke, op. cit. SS. 2-3.
- ⑪ Vgl. Meinecke, Staat und Persönlichkeit. Berlin, 1938. u. Derselbe, Vom Geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte. Leipzig, 1939. 前者は、Derselbe, Schaffender Spiegel. Leipzig, 1948. に、Derselbe, Zur Theorie und Philosophie der Geschichte. M. W. IV. Stuttgart, 1959. に収録されている。またその内の論文「Kansalität und Wert」(M. W. III. S. 61 ff.)は、「世界市民主義と国民国家」に、殊に「国家理性の理論」に関連するものとして注目される。なおこの間の事情は、中山治一氏の前者「国家と個性」後「歴史主義の立場」の訳者「あとがき」(それぞれ二二九頁以下、二二九頁以下)に詳しい。
- ⑫ Meinecke, Die Entstehung des Historismus. M. W. III. München, 1959. S. 1. S. 4.
- ⑬ Meinecke, op. cit. SS. 1-3.
- ⑭ Hofer, op. cit. S. XII. S. XXVII.
- ⑮ Goetz, Friedrich Meinecke. Leben und Persönlichkeit. H. Z. Bd. 174. Heft 2. SS. 244-46. なお島田雄次郎氏「ヒストリシズム・ソニエーショリフトの回想」(「史学雑誌」第五十九編第九号六四頁以下)にも詳細に述べられている。

- ⑭ Hofer, op. cit. SS. XXV-XXVI.
- ⑮ Meinecke, Die Deutsche Katastrophe, 4te Aufl. Wiesbaden, 1949. S. 7.
- ⑯ Meinecke, op. cit. SS. 7-8.
- ⑰ Meinecke, loc. cit.
- ⑱ Meinecke, op. cit. SS. 172-73.
- ⑲ Meinecke, op. cit. S. 151 ff.
- ⑳ Meinecke, op. cit. S. 163-64.
- ㉑ Meinecke, op. cit. S. 64. S. 73. S. 131. S. 12. S. 14. SS 130-32. S. 18.

五、むすび — マイネッケの良心 —

マイネッケは、同じ「ドイツの悲劇」の中で、「近代文化及び文明に浴している人々にとって最も重要なことは、精神生活の倫理的並びに非倫理的な力の間の、一つの健全で、自然と、而も調和のとれた関係である。何故なら、正しくこの近代的文化と文明が、それがもつ特性によってかかる均衡を脅かしているから。悟性と理性は：即ち一方の力であり、心情、空想、熱望及び意識が他の領域の力である。だが究局においては、理性、従って合理的な力が、精神の全体的な、波打つような動きを支配すべきである。尤もこの理性は自ら既にその最高且つ最善のものをを行うためには、非合理的な力によっても養われなければならない。…だが、善きもの、美しきもの、真なるもののあらゆる領域において、最後には執行権を行わねばならない意志は、魂の力の全体から昂まり来る、而してそれらすべてを消滅、調停し、且つ指導する支配者たる理性の女王に従う義務がある。…われわれは、ここではただ、ヒトラーの人間性の中で明らかとなっているあの均衡混乱についてだけ論じたいと思う⁽¹⁾」、と述べているが、かかる理性の尊重が、また直ちに良心の堅持に通ずること、いうまでもあるまい。マイネッケが、ヒトラー時代における良心の喪失を如何

に憎しみをもって眺めていたかは、既に見たところであるが、それはその前段で、「われわれは今なおビスマルク帝国の中で、ヴァイマル共和国においてのように、良心と思想の自由を享受した⁽³⁾」と、往時への懷想を洩していることによつても、充分窺うことが出来る。かくてわれわれには、以上私が甚だ杜撰ながら述べ來つたマイネッケの Nation を中心とした諸問題の中に、彼の終始変らぬ歴史家としての良心を見出しうるようである。あるいはまたそれは、彼の Nation の問題を基軸として展開された諸見解は、その何れもが、彼の歴史家としての良心の現われ以外の何物でもなかった、というべきかも知れない。⁽⁴⁾

一九五二年十月、彼と深く永い繋がりをもつ「史学雑誌」は、宛かも九十歳の長寿を迎えた一代の碩学マイネッケを祝つて、特集号を贈つたが、ゲッツは既に若干引用もしたその巻頭論文「フリートリヒ・マイネッケーその生涯と人柄——(Friedrich Meinecke. Leben und Persönlichkeit)」の最後を、マイネッケは、「ドイツの興隆と崩壊のこの数十年間のドイツの運命を示そうとした。それは責務と運命の問題であり、崩壊と再建の問題であり、ドイツの過去に淵源する倫理的な力による革新の問題である。他の人々が絶望している間に、彼はあらゆる苦難にも拘らず、将来を得ようとする。フリートリヒ・マイネッケとともに半世紀以上もこの時代を彷徨したもの、更らには、彼とともにビスマルク帝国の冷淡さに生き、世界大戦の時代の憂慮を抱き、最も暗黒な時代にあつても動揺することなく、希望を屈せずもっていた人々は、誇りと感謝の念をもつて、彼をわれわれ民族の信頼しうる代表者と考へたのである。環境のあらゆる変化の中で、彼はいつも同じ彼であつた。友情においても、学問においても、祖国の仕事においても毅然として、また人のために尽した。彼は、われわれすべての者にとって龜鑑である⁽⁵⁾」と結び、心からなる敬意と讃詞をおしまなかつたが、私もまたここにあらためて、永き風雪に堪え來つたマイネッケの学者としての偉大さと幸福を思わずにはおられなかつたことを想出す。そして彼は、翌々一九五四年二月喪くなつた。

以上私は、マイネッケにおける Nation の問題を色々の視角から検討して來たため、今更ら結論めいたものをここ

に要約する煩を避けたいが、マイネッケにおける Nation の問題に対する私の理解の仕方は、先のランケの場合とはかなり異り、⁽⁷⁾ いわば肯定的であった。今の私には、少くともそのテーマに関する限り、論旨の不備などは兎も角、このことは必ずしもそう大きな誤りがないように思われるが、然しマイネッケ史学そのものについていえば、私もまた他に数々の問題を抱かざるをえない一人である。

例えばホーフナーが、「マイネッケの偉大な理念的著作の三部作は、自から一つの基本的テーマに還る」としながら――そして私の右の考察は、主としてこの線に副って行われ来たともいえようが――「だがテーマの根本が如何に統一的にみえようとも、それぞれ労作を支配している調子は非常に違っている。最初の『世界市民主義と国民国家』は、殆んど華麗なまでに光り輝いて、樂觀的な生の期待に支えられている。第二の作『国家理性の理念』は悲劇的で、だが不協和音に満ちて英雄的でもあり、また自己主張の意志に満ち満ちている。第三の労作『歴史主義の成立』は、澄み切った、殆んど光り輝く不可知論と諦観の相をもった老人の智慧の労作である」⁽⁸⁾と述べているように、外からの大きな歴史的推移とも絡まったその永い間の学問的遍歴への緻密な跡づけと、彼が一九四七年行った「ランケとブルクハルト (Ranke und Burchardt)」の講演を中心とした、右と当然関連するマイネッケとランケ、ブルクハルトの関係の問題⁽⁹⁾、はたまた、ゲッツによって、「ナチズムにはただ最少限の容認をも与えようとする誘惑には、決して陥らなかつた」⁽¹⁰⁾と説かれるマイネッケにも拘らず、ナチズムを是認するかの如き見解を述べた「史学雑誌」百五十号のトライチュケ生誕百年記念号への「序」⁽¹¹⁾に対する解釈の問題等々、流石に永年歴史の激しい動きの中にあるが、而もそれとともに真剣に生き抜き来た一代の巨匠マイネッケの史学については、なお究明すべき点多々あるはいうまでもない。私は、殊に最後の問題に強く関心をひかれ、かつて卑見発表の機会をもったが、⁽¹³⁾ 若しこれらにつき、なお充分な推敲をかさねて更らにマイネッケ史学の核心に触れうるならば、あるいは、マイネッケにおける Nation の問題に対する私の理解もまた、一層深まりうるのかも知れない。

- ① Meinecke, Die Deutsche Katastrophe. 4te Aufl. Wiesbaden, 1949. SS. 56-57.
- ② 第四節註②
- ③ Meinecke, op. cit. S. 131.
- ④ 矢田俊隆氏が「フリードリッヒ・マイネッケ」、「自由主義十講」三〇三頁以下で、マイネッケを、いわゆる自由主義思想家として取りあげるのは、ある意味で相応しくないとしても、「彼の自由主義の根本にある考え方は、極めて簡単な、一種の道徳によって国家の政治を純化して行くという立場、それに基く平和主義であった」（同三三五頁）として、彼を二十世紀の思想界にもつゝ、やはり独自の一人の自由主義思想家と呼ぶことは間違いないとされているのも興味深い。
- ⑤ Vgl. H. Z. Bd. 174. Heft 2.
- ⑥ Goetz, Friedrich Meinecke. Leben und Persönlichkeit. H. Z. Bd. 174. Heft 2. S. 250.
- ⑦ 第一節註⑥
- ⑧ Hofer, Einleitung des Herausgebers zu "Meinecke, Die Idee der Staatsräson. M. W. I. München, 1957." S. VII.
- ⑨ Meinecke, "Ranke und Burckhardt" in Aphorismen und Skizzen zur Geschichte. 2te Aufl. Stuttgart, 1952. S. 143 ff. これは M. W. には入っていない。なお中山治一、岸田達也両氏のこの訳「ランケとブルクハルト」への「解説」（同八一頁以下）は、示唆するところ多い。
- ⑩ Goetz, op. cit. S. 246.
- ⑪ Vgl. Meinecke, Geleitwort zum 150. Bande der H. Z. und zum 100. Geburtstage Heinrich v. Treitschkes. H. Z. Bd. 150. S. 1 ff.
- ⑫ 日本西洋史学会第五回大会において、「マイネッケについて」の発表を試みた私の中心問題は、主としてこの点についてであった。

附記 拙稿は文部省交付の科学研究費による研究の一部である。